

15. 兵庫津遺跡 第67次調査

1. はじめに

現在の兵庫港の前身は、中・近世の兵庫津であり、古代には大輪田泊と呼ばれた。平安時代末の平清盛による経島修築を経たのち、日宋貿易の拠点として港が整備され、船舶の航行・物流が促進される。室町時代には日明貿易の出港地として兵庫津が利用され、外交上の窓口としても津は機能していた。

織豊期に入り池田恒興が兵庫城の築城を経て、続く徳川幕府成立によって、港およびその後背地の都市は、近世兵庫津として新たな段階を迎える事になる。

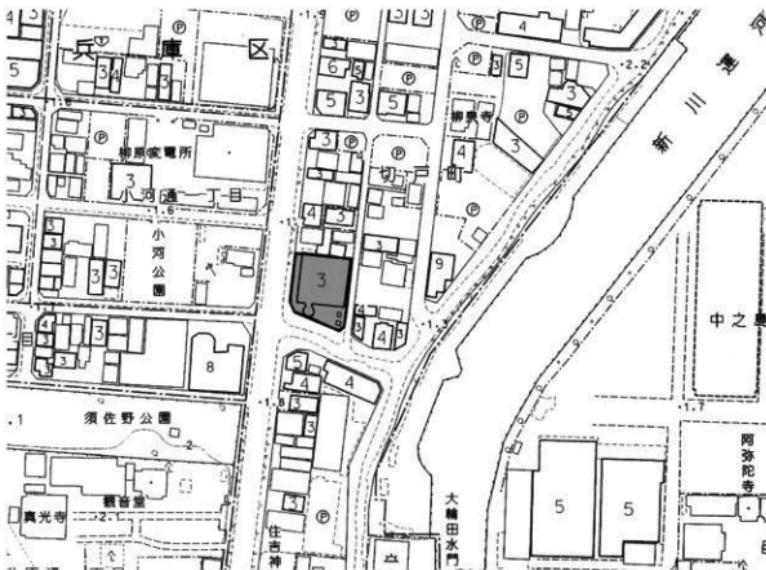


fig.185 調査位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、市営住宅の建設に伴うもので、建物基礎によって遺構面が損壊していないと判断される部分のみを対象とした。工事予定範囲の内、3か所に調査区を設定したが、II区については重機による表土掘削の過程で、現況地盤より2m程度まで完全に削平されていることが明らかになつた。以下、I区およびIII区について詳述する。

基本層序

今回の調査地は、調査対象地全体に既存建物の地中梁が存在した。その余掘り部分も含め、広範囲が調査着手時点での現況地盤から2mを超えてなお、現代の盛り土であった。

遺跡の損壊されていない範囲は、それぞれの調査区の中に小さく島状に残った状態で、その中にも多数の擾乱坑があった。従つて、調査地全体を通しての層序の把握は不可能であった。



fig.186 調査地全景（北西から）

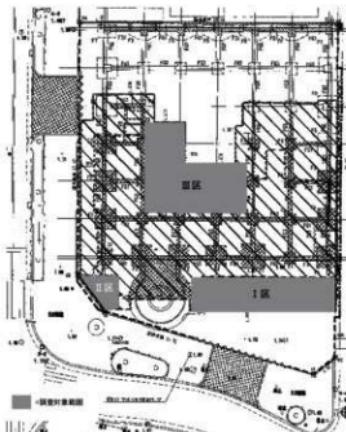


fig.187 調査区配置図

I区の層序 5面の遺構面を確認している。現況地盤から約80cm掘り下げた、標高0.7m前後までが現代の盛り土で、それを取り除いた地点で江戸時代と思われる第1遺構面を確認した。その下層、標高0.5m前後で同じく江戸時代の第2遺構面を、さらに下層の標高0.3m前後で中・近世過渡期の第3遺構面、標高0m前後で中世後期の第4遺構面、標高-0.2～0.3mに中世初頭から前期、一部古代の遺構を含む遺構面（第5遺構面）と続く。

第1から第3遺構面までは、当該遺跡の広い範囲でこれまでにも確認されている近世の整地層を基盤層として、遺構が築かれていた。一方第4、第5遺構面は、風性の堆積によって自然に形成された砂層が基盤である。

III区の層序 5面の遺構を確認しているが、第4遺構面に関しては遺構検出が難しく、第5遺構面とはほぼ同レベルでの検出となった。第4遺構面と第5遺構面との間の堆積が薄く、下位の遺構を第4遺構面上で一部検出してしまったことによる。

現況地盤から約80cm掘り下げた標高0.7m前後までが現代の盛り土で、それを取り除いた地点で、江戸時代と思われる第1遺構面を確認した。その下層、標高0.5m前後で、中・近世過渡期の第2遺構面、標高0.2m前後で中世後期の第3遺構面、標高-0.2～0.3mに中世初頭から前期、一部古代の遺構を含む第4・5遺構面と続く。

第5遺構面を形成する遺構基盤層の砂層にも、古代～古墳時代の遺物が含まれており、第5遺構面以下に古代～古墳時代の遺構面が存在する可能性があるが、安全確保が難しいため、調査を断念した。

各遺構面の年代観は、次年度に予定されている出土遺物の整理作業によって修正が加えられるべきもので、かつ、どの遺構面にも上位または下位の遺構が混在することをあらかじめ断つておく。また、全体像の不明瞭な遺構については、S Xの呼称を用いる。

I区の遺構

設定した調査範囲50m²のうち、削平されずに遺構面が残っていた範囲は南東側の12.5m²程度であった。

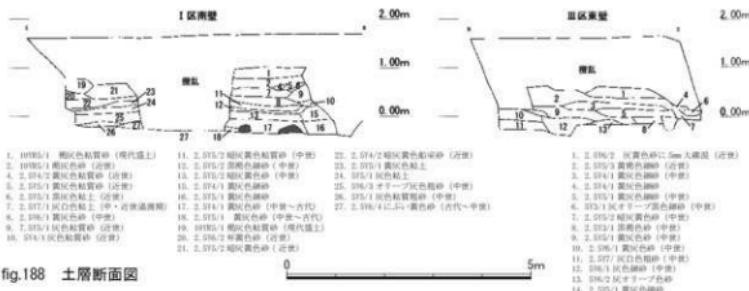


fig.188 土層断面図

第1遺構面 (近世)

ピット4基、溝2条である。ピットの内3基は一列に並ぶ状態で確認している。

ピットSP101・103・104 いずれも直径20cm、深さ25cm程度のピットである。3基が東西方に向直列する状態で検出された。S P104は底に礎盤石が据えられている。

S P101-104の距離は1.4m程度、S P104-103の距離は1.2mである。掘立柱建物の柱間としては狭く、柱間も数値にはばらつきがある。建物でなく柵の可能性も考えられる。

溝SD101 長さ2.1m、幅40cm、深さ約17cmを測る浅く短い溝である。東西に走る不定形な平面形を持ち、西側を攪乱に切られて全長が不明である。

溝SD102 長さ85cm、幅20cm、深さ15cmの浅く短い溝である。SD101に切られている。

第2遺構面 (近世)

ピット4基と不定形の土坑1基を確認した。

ピットSP201～203 直径20～35cm、深さ10cm程度のピットである。201-102と202-203の組み合わせが直交し、建物隅である可能性を考えられるが、柱間は1.1m程度と狭く、建物でない可能性もある。

土坑SX201 大半は調査区外で、確認できた範囲では直径2m以上、深さは20cm程度である。17～18世紀頃と思われる陶磁器の破片が多く出土した。兵庫津遺跡で多く確認されている、廃棄土坑的な用途の可能性が考えられる。

第3遺構面 (織豊期～戦国時代)

ピット2基、不定形土坑1基、形状不明の遺構2基、廃棄土坑1基を確認している。SX301については、第3遺構面上面まで掘り下がった段階で全体が露呈したため、便宜上第3遺構面の遺構として取り扱ったが、出土遺物の示す時期は近代である。

ピット いずれも直径20cm、深さ15cm程度のピットで、用途不明である。ほかに建物として組み合うピットも見つからなかった。

土坑SX301 長辺1.8mの方形ないし長方形の平面形で、深さ45cm程度の坑に、瓦を大量投棄したものである。大半は明治時代の棟瓦だったが、一部近世の本瓦（丸瓦、軒平瓦）が混じっていた。

瓦の上には、白色系の粘土が約10cmの厚さで張られており、一部は土堤状の高まりに盛り上げて固められていた。

第4遺構面 (室町時代)

ピット1基、不定形の土坑3基、長さ4.0m以上の落ち込み1か所を確認した。

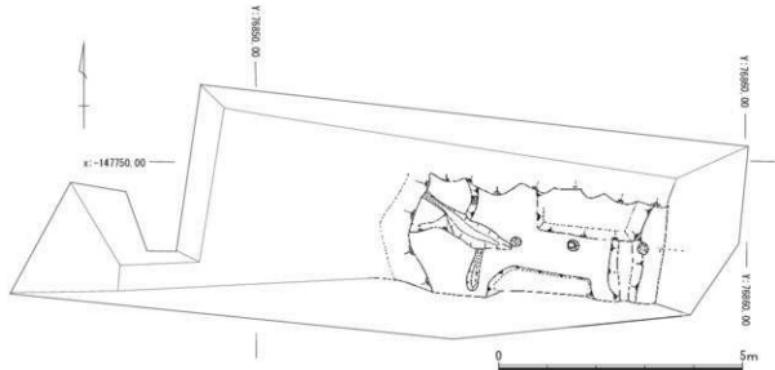


fig.189 I区第1遺構面平面図

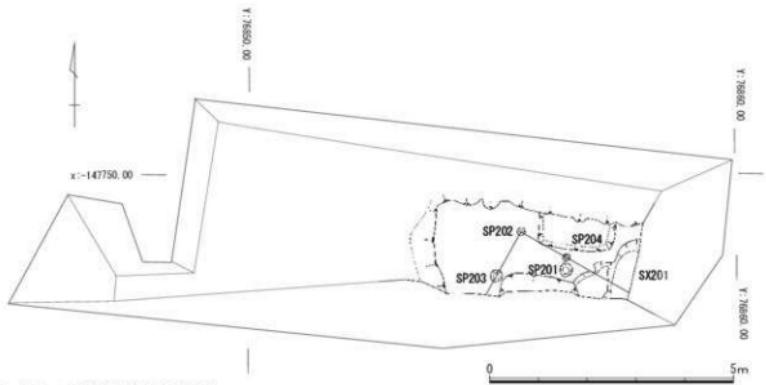


fig.190 I区第2遺構面平面図



fig.191 I区第1遺構面全景 (北東から)



fig.192 I区第2遺構面全景 (北東から)

ピットSP402 直径約60cm、深さ約30cmである。断面観察により、柱痕跡状の土色を示す部分が確認された。掘立柱建物の柱痕である可能性が考えられるが、調査範囲内に組み合う柱穴はない。

SX403 直径1.2m、深さ25cm程度の土坑である。土師器小皿を中心投棄した遺構、いわゆる「かわらけ土坑」である。

SX401・SX404 SX401は検出した範囲で直径1.2m、深さ28cm程度である。SX404は直径1.45m、深さ28cm程度である。全体の形状などは不明である。

第5遺構面（平安時代末～鎌倉時代）

ピット3基、落ち込み1か所、落ち込みに並行する溝1条、土坑2基を確認した。

ピットSP503 検出した範囲で、直径30cm、深さ12cm程度である。底に礎盤石を据えた掘立柱建物の柱痕である。調査地内で、これと組み合う他の柱穴は確認できなかった。

落ち込みSX502・溝SD501 調査区の南辺にほぼ平行する方向で、一辺5m以上の落ち込みを確認した。深さは15cm程度である。遺構の壁体はほぼ垂直に立ち上がる。床面に拳大～子供の頭大の花崗岩を集積した場所が一か所、人頭第の花崗岩の石が一か所検出されたほか、ピットあるいは土坑と思われる穴も二か所で確認している。

大半が調査区外のため、全体の形状が不明だが、この遺構の北側に並行して、幅20cm、深さ5cm程度の溝が存在する。溝底には一部ピット状に円形で深くなる部分が7か所あり、柱材か杭材を、布掘り状に掘削した溝に据えた痕跡の可能性が考えられる。溝と落ち込みのセットで、何らかの建物であると考えることもできるが、検出範囲が狭く確定にいたらない。



fig.193 I区第3遺構面全景（北東から）

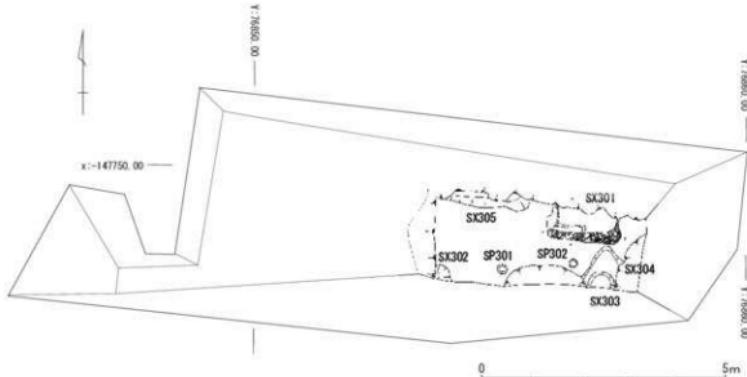


fig.194 I区第3遺構面平面図

土坑SX501 S X501は近世遺構である。本来は第1面ないし第2面で検出すべきものだが、調査区の端部に深く切り込まれており、周囲が崩落する可能性があったため、この面まで一部掘り残した。木材の破片などが出土している。

土坑SX503 平安時代末頃から鎌倉時代初頭と考えられる土器が出土した遺構である。馬なし牛の歯と思われる動物遺体の一部が伴っていた。検出した範囲で直径1.5m以上、深さ25cm程度である。

ピットSP502 直径60cm、深さ30cm程度のピットである。杭と思われる木材の一部が据えられた状態で出土した。

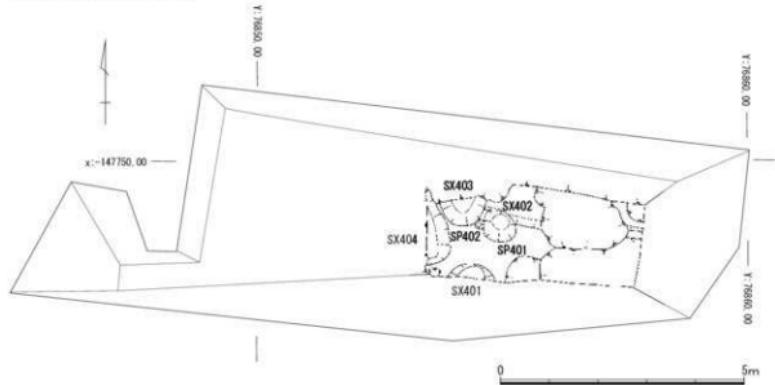


fig.195 I区第4遺構面平面図

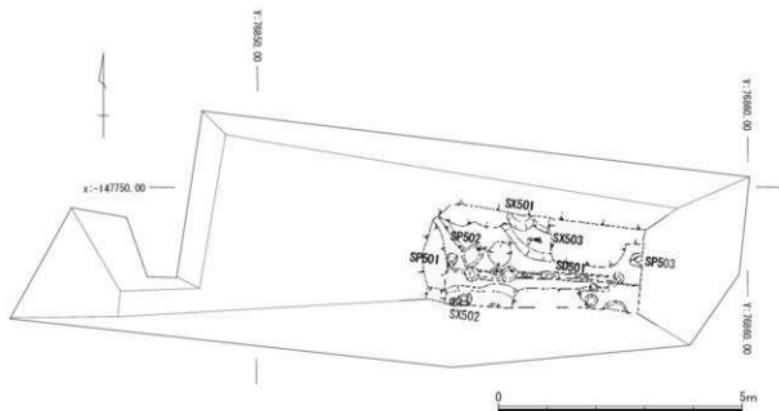


fig.196 I区第5遺構面平面図



fig.197 I区第4遺構面全景（北東から）



fig.198 I区第5遺構面全景（北西から）

III区の遺構

調査範囲 83 m²のうち、削平されずに遺構面が残っていた範囲は南東側の 30 m程度であった。

第1遺構面（近世）

土坑 1 基のみを確認した。検出した範囲で直径 1.15m 以上、深さ 18cm 程度である。

第2遺構面（近世～織豊期）

ピット 8 基、落ち込み 9 基を確認した。落ち込みの大半は一部分を検出しただけで、機能や形状がわからない。この面では近世の遺構と中・近世過渡期の遺構を同一面上で検出しており、時期的には I 区の第2遺構面および第3遺構面に相当すると思われる。

検出遺構の内、調査時の所見で近世のものと確定できるのは S P202・203、S X203・204・206 であり、中世と判断可能なのは、S P201、S X201・202・205 である。出土遺物から、14 世紀ないし 16 世紀頃と思われる。

ピット SP204・206・207 挖立柱建物の隅部分である可能性が考えられる。柱間は 1.4～1.7m 程度で、出土遺物から判断して、中・近世過渡期の遺構である。

土坑 SX202 大半の遺構は規模、形状、機能ともに不明なものばかりである。S X202 は一边 90cm、深さ 40cm 程度の平面方形を呈する土坑である。ほぼ垂直な壁体を有する。

第3遺構面（中世）

今回の調査で、最も遺構が密に確認された。またピットの内部に、部分的に焼土が含まれているものが多数みられ、ほとんどの遺構の埋土から、土器とともに鉄滓が出土した。

土坑 10 基、ピット 21 基、鍛冶に関連すると思われる遺構の一部を 1 か所、井戸の可能性が高い土坑 1 基、列石を有する浅い土坑 1 基を確認している。ピットの内、底に礎盤石を据えた掘立柱建物の柱痕は 6 基、土坑の内、「かわらけ土坑」は 3 基である。

掘立柱建物 1 S X313 及び S X312 は、埋土断面の柱痕跡が明瞭、あるいは底に礎盤石が残されていたことから、掘立柱建物の一部と判定した。柱間は 1.7m 程度である。この 2 基の規格は類似していており、長径 50cm、短径 40cm 程度の平面椭円形で、深さが 40～50cm と深い。柱当りだけ一段深く掘り下げている。周辺の削平が著しく、組み合う他の柱穴が確認できない。

掘立柱建物 2 S X301・S P306・S P308、および S P316・S K302・S P324・S P309 で構成される掘立柱建物と解釈することができる。礎盤石を持つものは、S P308・316、S X301 である。これを 1 棟の建物と仮定した場合、1 間 × 3 間以上の建物となるが、梁、桁方向の

判断は不可能である。

南北方向の柱間は 1.6 ~ 1.7m 程度で揃い、東西方向の柱間は 1.5m 程度に収まる。平面図上は S X307 がさらに並ぶようにも見えるが、この遺構は浅く横に広がる土坑状のもので、構造的に柱穴と考えにくい。

柱穴SK304 硙盤石が遺存していることから、明らかに掘立柱建物の柱穴であると分かるものの組み合う他の柱穴が見つからず、建物構成が不明なピットである。大半が搅乱により欠損しているが、検出した範囲での直径は 60cm 以上、深さは 13cm 以上である。

鍛冶関連遺構SX318 L字に屈曲する調査区の内角付近で、輪羽口が出土する遺構の一部を確認した。検出できたのは遺構西辺および北辺の一部のみで、大半は調査区外であり、正確な形状、規模、構造等は不明である。西辺の長さは 2m 程度、掘削できた範囲での深さは 28cm である。S P325 に切られている。

土坑SX311 南北辺 2.2m、東西辺 1.0m、深さ 38cm 程度の大型の落ち込みを掘削したところ、遺構東端の床面で直径 60cm、深さ 26cm 程度の円形の土坑が検出された。土坑内には底が一部欠損しているものの、ほぼ完形の状態で、瓦質羽釜が一段くぼんだ土坑に正位置に据えられていた。井戸底に敷設する施設と考えられる。

また、S X311 を羽釜の据えられていた土坑の上部構造として調査したが、S X311 が井戸の掘り方とすれば、羽釜の位置が端に寄りすぎており、同一の遺構ではなく別の遺構の可能性も考慮しなければならない。

土坑SX316 長径 1.9m、短径 1.5m、深さ約 10cm の浅く大きな土坑である。土坑内には子供の頭大の石が並べられており、何らかの列石状の構造物の一部と思われる。同様の石は土坑

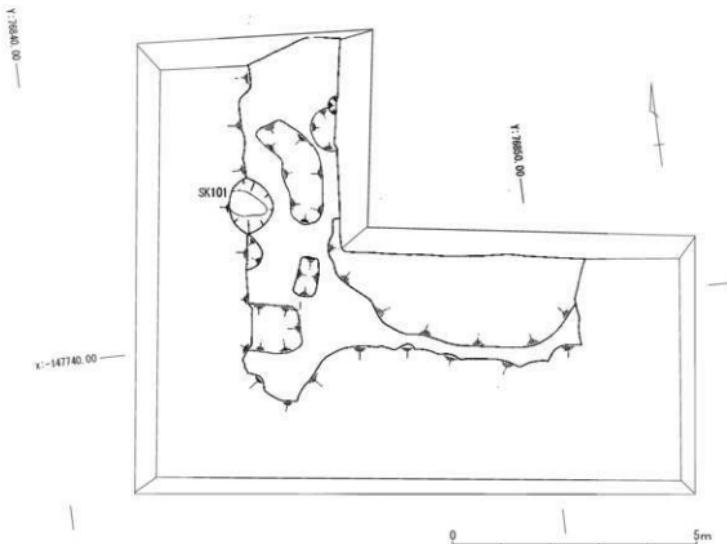


fig.199 III区第1遺構断面図

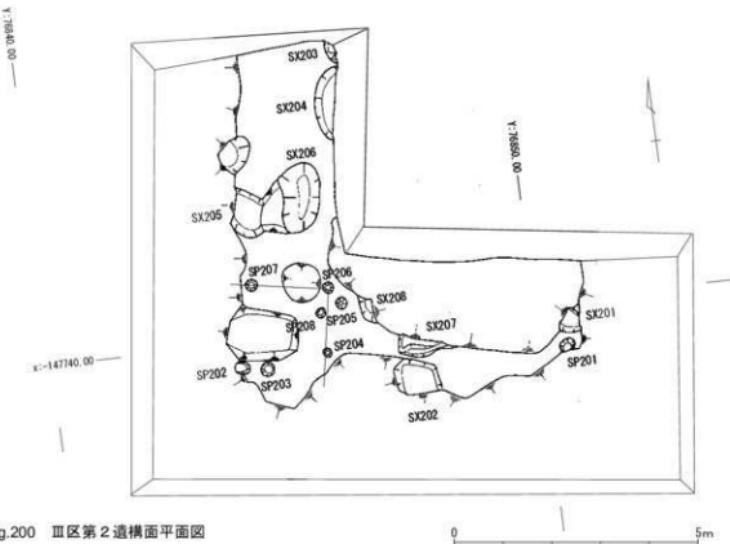


fig.200 III区第2遺構面平面図



fig.201 III区第1遺構面全景 (南西から)



fig.202 III区第2遺構面全景 (南西から)

北側にも数個残存しており、本来は列状でなく、土坑の形状に近い配石であった可能性が考えられる。

第4・5遺構面 (鎌倉時代～奈良時代)

本来2時期2面に分けて調査すべきところを、下位の遺構面を同時に検出している。調査中、明らかに上位と判断できたのには400番台の遺構番号を付し、上下どちらの位相に属するか調査中に判定しがたかったものには、500番台の番号を付した。

この面で検出した遺構は土坑が7基、ピットが15基、溝2条、井戸1基、堅穴建物の可能性のある遺構1か所、溝ないし湿地を形成すると思われる落ち込み1か所である。

掘立柱建物1 底に礎盤石を据えたピットS P501-503を西列、S P506-508を東列とする柱列となる。1間×2間以上の建物と考えられるが、南側に続く柱穴がないため、北および西に広がると推定される。東西方向の柱間は2.0mと広く、南北方向の柱間は1.7mである。

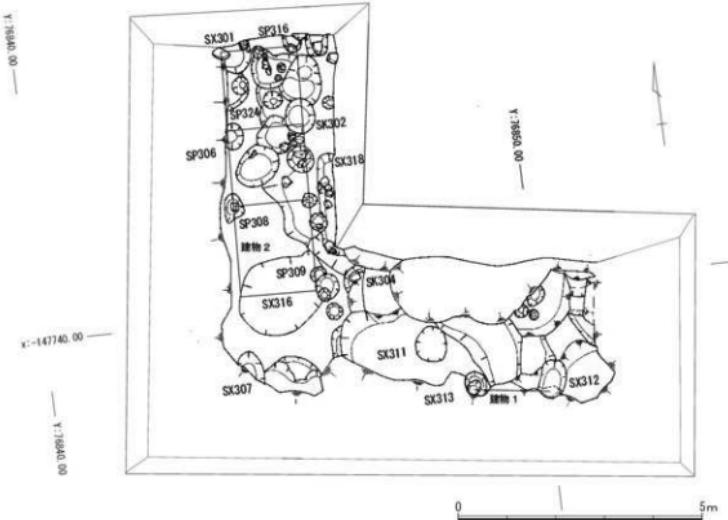


fig.203 III区第3遺構面平面図

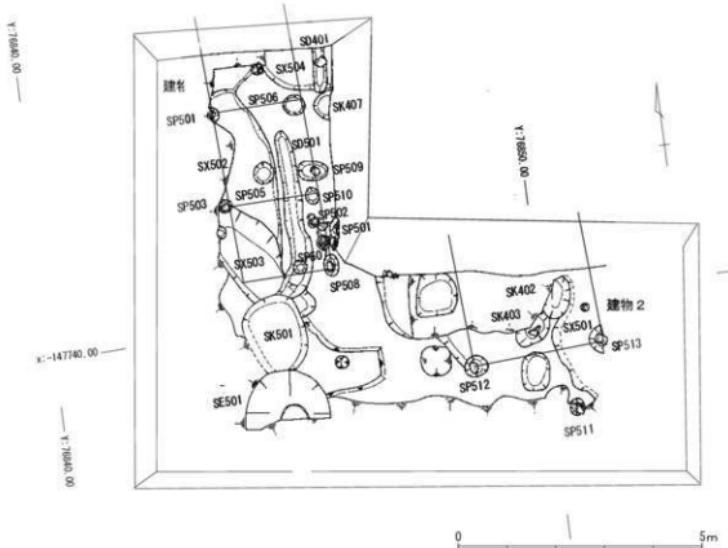


fig.204 III区第4・5遺構面平面図



fig.205 三区第3遺構面全景(南西から)



fig.206 三区第4・5遺構面全景(南西から)

掘立柱建物2 S P513、SP512 がそれぞれ礎盤石を持つ柱穴であることから、これらのピットを基点に建物の存在を想定するのが妥当と思われる。柱間が 2.4mとかなり広くなるが建物軸方向は建物1と揃う。

土坑SK401～403 いわゆる「かわらけ土坑」である。本来は第4遺構面として検出すべき性質のものである可能性が高い。SK402 に SK403 が切られている。どちらも梢円形で、一部擾乱で欠損している。SK401 は長径 80cm 程度、深さ 15cm 程度、SK402 は長径 80cm 程度、深さ 14cm 程度、SK403 は長径 90cm 以上、深さ 25cm 程度である。

井戸SE501 南半を擾乱で欠損した状態で確認した。SK501 に切られている可能性が高い。崩落の危険性があり完掘を断念した。掘形の直径は 1.7m 程度、板材を組んで構築した井戸枠の直径が内寸で 55cm 程度である。掘形、井戸枠、どちらの埋土からも少量の土師器、須恵器の小片が出土している。

土坑SK501 本来は、第4遺構面で検出すべき遺構と考えられる。長径 1.6m、短径 1.2m 程度、深さ 12cm 程度の平面梢円形だが、西側を一部擾乱で欠損している。

SX503 長辺 2.1m 以上、短辺 1.25m 程度、深さ 23cm 程度の長方形を呈する。壁体は垂直に近い立ち上がりである。

SX504 検出した範囲で直径 1.4m、深さ 20cm 程度の円形土坑である。調査区外に続くため、正確な形状、規模は不明である。

遺構の構築順序は SX502 (奈良・平安時代) → SX503 (奈良・平安時代) → SD501 (奈良・平安時代?) → SK501 (鎌倉時代) となる。詳細な時期差については、出土遺物を検討しなければ判断できない。

溝SD401・SD501 SD401 は本来第4遺構面で検出すべき遺構である。幅 30cm、長さは検出した範囲 33cm 以上、深さ 10cm 程度である。南端で西側に屈曲する。

SD501 は本来第4遺構面で検出すべき遺構の可能性も残すが、鎌倉時代と思われる SK501 に先行しているため、現時点では判断を保留した。今後出土遺物の詳細な検討によって、時期を確定したい。

落ち込みSX502 長辺 4.2m 以上、幅 1.2m 以上、深さ 10cm を測る。壁体は緩やかに立ち上がり、床面はほぼフラットである。上位の遺構に大きく切り込まれ、本来の形状、規模が判断し難い。竪穴建物の可能性があるが確定はできない。出土遺物は奈良時代ないし平安時代のものだが、詳細な検討が必要である。

落ち込みSX501 調査区東端で、第4・5遺構面の基盤層の一部が、湿地状の粘土層によって形成されていることを確認した。本来的には第5面よりさらに下位の遺構となるが、安全上完掘不可能のため、肩部分だけを確認のため検出した。50cm以上掘り下げたが、遺構底に達しなかった。鎌倉時代～奈良時代までの土器・木片などを出土した。

3. まとめ

今回の調査地では、二か所の調査区で、それぞれ5面の遺構面を確認した。ただし調査区同士、面的な連続性が認められるわけではなく、微妙な時期差を含みながら相前後する。調査時の所見では、おおむね、I区第1面・第2面=III区第1面に、I区第4面=III区第3面に、I区第5面=III区第4・5面に相当すると思われる。

概念的な層序は①近世→②近世→③中・近世過渡期→④中世後期→⑤中世前期から初頭、一部古代を含む→⑥古代から古墳時代（未調査）となる。

以下、本調査の成果を簡単にまとめる。

①土壤の違い

今回の調査では、近世遺構面と中世遺構面の土壤的な差異が際立った。近世遺構面はいずれも人工的な固い整地土の上に形成されている。近世の兵庫津は、幾度かの埋立造成を繰り返して町場を拡大してきた経緯があることと関係していると思われる。

一方、中世以前の遺構面はせい弱な砂層上に形成されていた。いわゆる海浜堆積物、砂丘・浜堤帯といった地質に属する土壤である。

②遺構密度の増加

5面の遺構面のうち、14世紀、15世紀の遺構面が最も遺構・遺物とも量的に豊富であった。当該時期が、中世都市として兵庫津が大きく飛躍した時期であることを示すと思われる。

③鍛冶関連遺構

14・15世紀の遺構面であるIII区第3遺構面では、鍛冶関連遺構を確認したものの、鍛冶炉検出には至らなかった。ただし同面で検出したほとんどの遺構から焼土あるいは鉄滓が出土している事、鉄滓の出土量から考えて、直近に鍛冶炉か、鍛冶職人の住居（工房）があった可能性がある。

④掘立柱建物

第3、第4遺構面では、礎盤石を持つ柱穴が多数検出されたにもかかわらず、擾乱による欠損等により、具体的な建物構造を把握しきれなかった。いくつか提示したものの、可能性にとどまっている。その中で、あえて当調査地の掘立柱建物の傾向を挙げるとすれば、柱間寸法は、平均値で1.7m前後を主体としており、軸方向は座標北にほぼ平行な点が指摘できる。

⑤平安末期～奈良時代の遺構

今回の調査のもっとも大きな成果は、中世初頭（平安時代末）まで遡り得る遺構面を検出したことである。今回の調査結果から類推して、本調査区だけにスポット的に遺構が存在すると考えると、中世都市の一部を捉えたと考えるのが自然である。

⑥出土遺物

今回の調査では、28リットルコンテナに換算して約20箱の土器、陶磁器、金属製品、鉄滓、木質遺物などが出土している。うち2/3程度が中世のものである。次年度の整理作業を待って、この報告で示した遺構の年代観の修正も含め、改めて詳細を報告したい。

16. 兵庫津遺跡 第68次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、風化の進んだ花崗岩により崩落しやすい六甲山地から流出した土砂と海流によって大阪湾岸に発達した、湊岬と和田岬のふたつの砂嘴に挟まれた湾の臨海部に立地する、奈良時代～近世にかけての遺跡である。これまでに60回を超える発掘調査が実施されている。

「兵庫津」は、古くは「大輪田泊」と呼ばれ、瀬戸内海航路の基幹港のひとつとして発展してきた。文献上では、平安時代後期には「大輪田船息」の記載が知られていたが、平成13年度に兵庫区芦原通で実施された第32次調査で、兵庫津遺跡において、初めて奈良時代の遺構と遺物が検出された。

「大輪田泊」は平安時代末の平清盛による大修築を経て、日宋貿易の窓口として繁栄する。鎌倉時代には、「兵庫（兵庫島）」と呼ばれるようになるが、室町時代の応仁・文明の乱（1467～1477年）により衰退し、国際港としての地位は堺に譲ることになったとされる。

安土桃山時代には、兵庫の町の中心に兵庫城が築かれた。平成24～26年度に中央市場本場移転に伴い実施された発掘調査（第57・62次調査）では、兵庫城の石垣・堀が確認された。明和6年（1769）には再び幕府領となり、兵庫城は「兵庫勤番所」となった。

18世紀以降には人口2万人を超える都市であり、幕末には国内の他の重要港と共に兵庫（神戸）開港が行なわれた。明治時代に入ると兵庫勤番所に初代兵庫県庁が置かれた。



fig.207 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建築に伴うものである。調査地は「兵庫津」の北側に存在した船入江である、「川崎船入江」および「佐比江」の北側に接した地点に位置している。

工事計画により、建物基礎の掘削が及ぶ範囲について発掘調査を実施した。調査区は西側より1区～4区として設定し、残土置場の確保の関係上、2分割の反転調査を実施した。

基本土層

調査地は、現況で東側の国道2号線道路面よりも約50cm高い。基本土層は、現地表面から深さ約30cm前後の盛土層下に、太平洋戦争時の神戸空襲に伴うものと考えられる焼土層が存在する。この下層に近代の盛土層といつかの整地層があり、この下層に近世と考えられる整地面（第1遺構面）を検出した。現地表面から第1遺構面までの深さは約1.3m前後である。

第1遺構面を構成するのは整地に伴う土層であり、基本的に北から南へ向かって堆積が確認される。整地を行なう際に土砂を搬入した作業状況を示唆するものとも考えられる。この整地層下に整地面（第2遺構面）を検出した。現地表面から第2遺構面までの深さは約1.7m前後である。3区では黄色シルトによる三和土状の整地面が確認された。第2遺構面の形成にも、3区で南から整地層が堆積している状況が確認された。第2遺構面以下の下層については、現地表下から深さ2.1m付近まで掘り下げ、灰色細砂、黄褐色細砂、褐色細砂などの砂層を確認したが、工事影響深度に達したため、それ以下の掘削は行わなかった。そのため、中世の遺構・遺物などを確認することはできなかった。

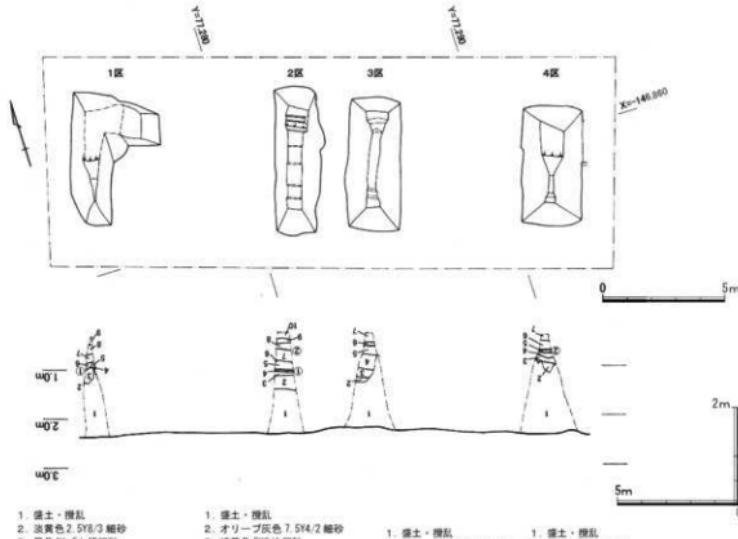


fig.208 調査区平・断面図

1区

北半は近代～現代の石組排水溝により、現地表面から深さ2.0m以上まで擾乱を受けていた。南半では遺構面が良好に遺存していた。

第1遺構面 南半中央で礎石と推定される平坦な石2基、北西角で遺構面が火を受け赤変した範囲1ヶ所を検出した。これに伴う施設などは確認されなかった。

第2遺構面 整地面として検出することはできなかった。整地中土から瓦、溶解物の付着した壁体状の塊状遺物、輪羽口と考えられる破片、鉄滓状の鉱滓などが比較的まとまって出土したが、狭小な調査区内での検出のため、詳細は不明である。

2区

調査地中央西側の調査区である。北端は近代の石製排水溝による擾乱を受けている。2面の整地面（遺構面）を確認したが、礎石などを確認することはできなかった。

3区

調査地の中央東側の調査区である。2面の整地面（遺構面）を確認したが、礎石などを確認することはできなかった。第1遺構面からは遺構は確認されなかった。第2遺構面では、南半で黄色シルトによる三和土状の整地面を検出した。町屋の土間などの可能性が考えられる。

4区

最も東側に位置する調査区である。北半は近代の石列や石組に伴い、擾乱受けている。南半では、2面の整地面（遺構面）を確認したが、礎石などの遺構を確認することはできなかった。

出土遺物

整地層から土師器、陶器、磁器、瓦、鉄製品、鉱滓、貝類などが出土した。

第1遺構面を構成する整地層からの出土遺物は、概ね18世紀後半～19世紀初め頃の時期が考えられる。特筆されるものとして、1区を中心に比較的多く出土した、鉄滓状の鉱滓、溶解物の付着した火を受けた壁体状の塊状片、輪羽口状の遺物がある。第2遺構面以下の整地層からの出土遺物は少量である。なお、4区の近代盛土層から、凸面に「明石 | 舞子焼 改瓦八」銘の刻印がある軒丸瓦が出土している。

3.まとめ

今回の調査では、近世後半の2面の整地面を検出した。1区では第1遺構面から礎石と考えられる石、遺構面の一部に火を受けた様な部分を検出した。下層の整地層からではあるが、輪羽口状の遺物や、鉄滓状の遺物が多く出土したことが特筆される。調査地の北東側の西出町2丁目で平成8年度に兵庫県教育委員会が実施した発掘調査では、19世紀代と推定される遺物と共に、大量の輪羽口が出土している。これは町の拡大に伴い、火災を引き起こしやすい鍛冶屋が郊外へ移転させられたものと考えられており、今回の調査とも関連性が窺われるものと

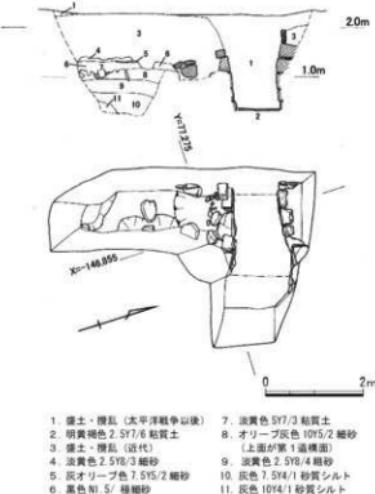


fig.209 1区第1遺構面平・断面図

して興味深い。この他は各区共に整地面が確認されたのみで、明確な遺構は確認されなかった。

『攝州八部郡福原庄兵庫津絵図』(以下、『元禄絵図』)から、調査地を比定すると、「川崎船入江」に架けられた橋の北詰北西側付近に位置する。元禄期の調査地東側は「若狭守經俊塚」の南側に続く、南北方向の道路西側に面した「西出町」の一部に接し、調査地は「田地」と表記される範囲であったと推定される。

今回の調査では、元禄期に遡る遺構・遺物は確認されておらず、『元禄絵図』に見られる様に17世紀末段階では、「町場」ではなかったものと考えられる。また、18世紀後半～19世紀初め頃と推定される2面の整地面は、嘉永期の『津中絵図控』に見られる様な、調査地付近の市街地化を示すものといえるであろう。

今回の調査では、2面の整地面の存在が確認されたものの、1区で礎石と考えられる石が検出されたのみであり、明確な遺構の存在は確認することはできなかった。しかし、「兵庫津」周辺における、明和期以降の開発の進行を示すものとして、貴重なデータであると言えよう。



fig.210 1区第1遺構横面全景 (北から)



fig.211 2区全景 (北から)



fig.212 3区全景 (北から)



fig.213 4区全景 (北から)

17. 大開遺跡 第16次調査

1. はじめに

大開遺跡は、六甲山地より南流していた旧渓川の右岸、沖積地内の微高地上に位置する複合遺跡で、縄文時代後期～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

兵庫大開小学校の校舎新築に伴う第1次調査では、突帯文土器を伴う弥生時代前期前半の環濠集落がほぼ完堀された。環濠は拡張を伴い、初期環濠段階では直径約40m、拡張環濠段階では長径約70mを測り、近畿地方における発現期環濠集落として知られている。

その後、15次にわたる発掘調査が行われ、第3・5・9・10・14次調査では、弥生時代前期後半に属する別の環濠集落が確認された。環濠は2重以上に巡っており、断片的な調査成果ではあるものの、第1次調査地の東側に推定内法110mの環濠集落が復元されている。



fig.214 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、第5次調査地の南側約50mの地点において、共同住宅建設に伴う工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を行った。

調査区は、北西側のトレンチを1区、南東側のトレンチを2区とし、1区より調査を開始した。遺物包含層上面までを0.25バッケホウ、以下を人力によって掘削した。

なお、調査区北東側では、従前建物による攪乱が1区でG.L.-2.1m、2区でG.L.-2.4m以上に及んでおり、遺構面が完全に削平されている可能性が極めて高いことから、調査不要と判断した。

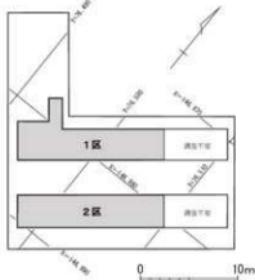


fig.215 調査区配置図

基本層序

現地表面の標高は T.P. 4.0m を測る。従前の建物基礎による擾乱が G.L. -1.0 ~ -1.3m にまで及んでおり、部分的に中世の遺物包含層である暗灰褐色砂質土が残存する。第1遺構面はその下層の灰黄色シルト～粘質土上面で検出したが、一部の遺構は遺物包含層中から切り込んでいた。第1遺構面から 0.1 ~ 0.2m 堀り下げた黄灰色シルト～粘質土上面が第2遺構面となり、T.P. 2.5 ~ 2.6m を測る。この層中に弥生土器が含まれていることから、遺構を確認するため調査区全面を 0.2 ~ 0.3m 堀り下げたところ、自然流路～湿地状堆積に遺物が含まれている状況であったが、1区の南西端で溝状遺構を確認したため、これを第3遺構面として検出を行った。その下層、数か所で断面調査を行ったところ、調査区全体を包括するような自然流路の存在が予想されたが、遺物の含有状況としても僅少であつたため、調査を完了した。

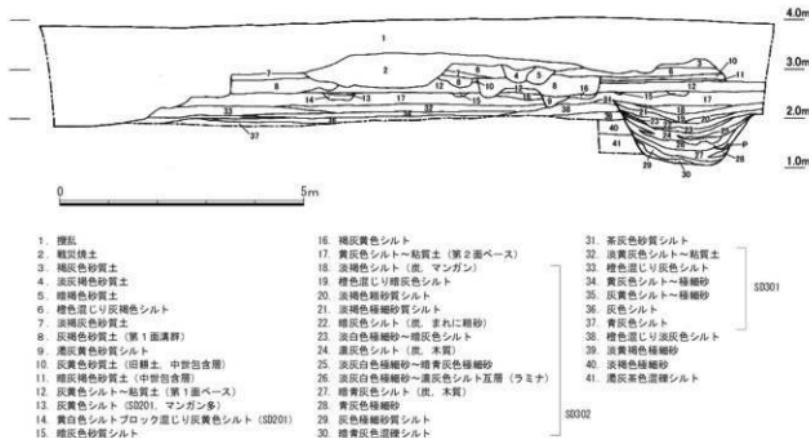


fig.216 1区南東壁土層断面図

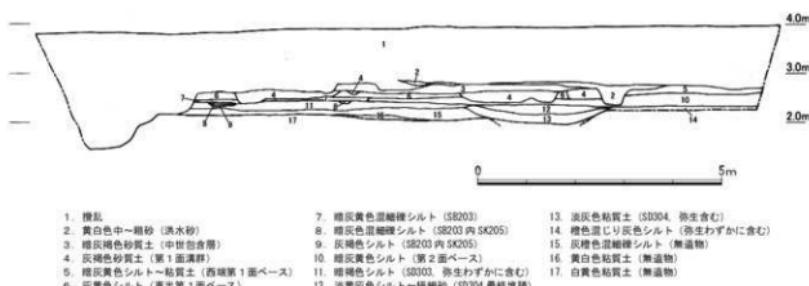


fig.217 2区南東壁土層断面図

第1遺構面

多数の溝状遺構・土坑を確認した。

溝状遺構 調査区全域において、現在の地割にはほぼ平行する多数の溝状遺構を確認した。溝状遺構は北西-南東・北東-南西方向に走り、長さ 1.5 ~ 4.5m、幅 20 ~ 70cm、深さ 10 ~ 40cm を測る。切り合ひ関係が複雑なため、複数の溝状遺構を 1 条として検出したものもある。土師器の細片の他、鉄釘などが出土した。14世紀頃の時期が考えられる。

土坑 長径 0.9 ~ 1.4m、深さ 20 ~ 40cm 前後の、不整形の落ち込みを土坑とした。埋土は溝状遺構と類似した砂質土が堆積している。14世紀頃の時期が考えられる。

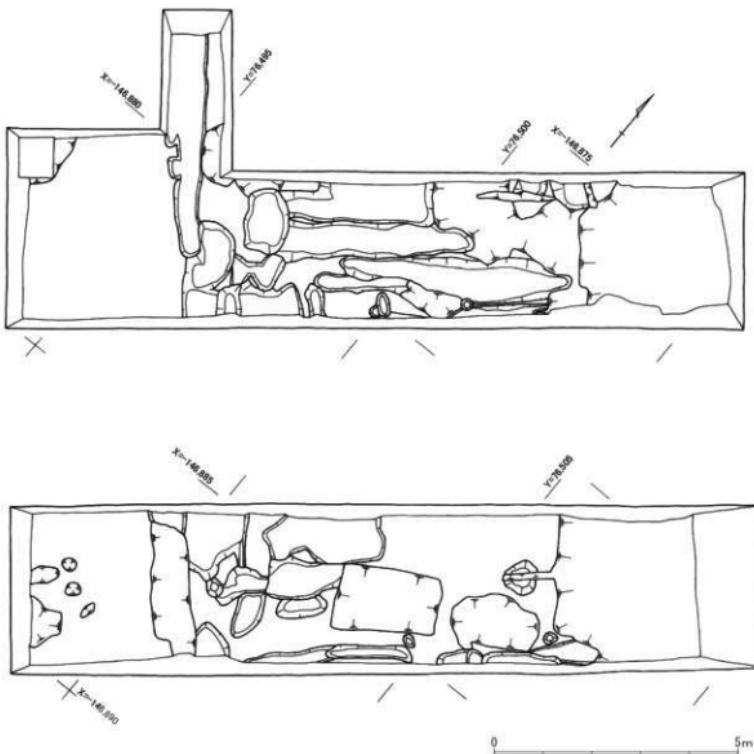


fig.218 第1遺構面平面図

第2遺構面

堅穴建物、土坑、溝状遺構、その他ピット等を確認した。

堅穴建物SB201 1 区西端で検出した楕円形の落ち込みで、堅穴建物の可能性がある。検出長 2.5m、検出幅 1.5m の範囲を確認した。調査区外へと続くため規模は不明であるが、堅穴建物であるとすると、全体の 1/5 程度を検出したものと考えられる。検出面からの深



fig.219 1区第1遺構面全景（南西から）



fig.220 2区第1遺構面全景（南西から）



fig.221 1区第2遺構面全景（北東から）



fig.222 2区第2遺構面全景（南西から）

さは 15cm で、周壁溝は確認できず、壁際に浅い落ち込みが 1 か所みられたが、柱穴等は確認できなかった。弥生時代前期後半の土器が出土した。

竪穴建物SB202 1 区東半で検出した長径 5m 以上を測る円形の竪穴建物である。攪乱及び第 1 面の溝状遺構によって削平を受けており、壁高は 5 ~ 18cm を測る。周壁溝は確認できなかったが、壁沿いを切るように直径 40cm、深さ 20 ~ 25cm のピットを 2 基検出した。底面付近の埋土には下層に由来する黄白色シルトブロックが混在していた。弥生時代前期後半の土器が出土した。

竪穴建物SB203 2 区東半で検出した円形の竪穴建物である。検出長 3.7m、検出幅 1.6m の範囲を確認したが、北東側は攪乱によって完全に削平されており、南東側は調査区外へさらに続いている。全体の 1/3 程度を検出したものと考えられ、長径およそ 6m 前後の規模と推定される。壁高は 10cm を測り、周壁溝は確認できなかった。床面付近で深さ 10cm の土坑を 2 基、その他ピットを検出した。ピットには深さ 20cm を測るものもあり、柱穴であった可能性がある。弥生時代前期後半の土器が出土した。

土坑SK202 2 区西端で検出した不整円形の土坑である。直径 90cm、深さ 30cm を測る。埋土は灰色系の粘質土で、弥生時代前期後半の土器が出土した。

第3遺構面

溝および自然流路を検出した。

溝SD301 1 区東半で検出した自然流路～湿地状堆積層である。1 区中央付近から北東

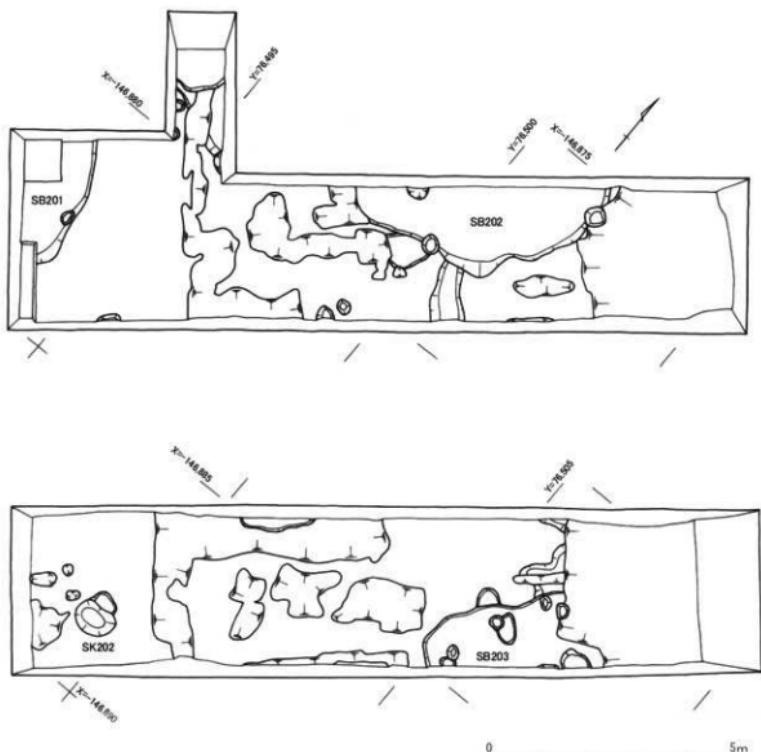


fig.223 第2遺構面平面図



fig.224 1区 SB202 (東から)



fig.225 2区 SB203 (西から)

側へと緩やかに落ち、その最終段階の堆積となる橙色混じり灰色シルトより、弥生時代前期後半の土器が出土した。

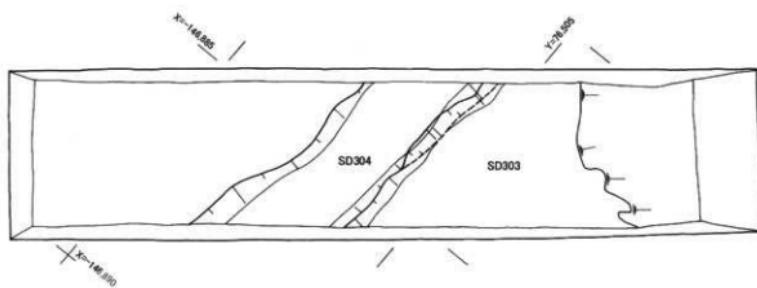
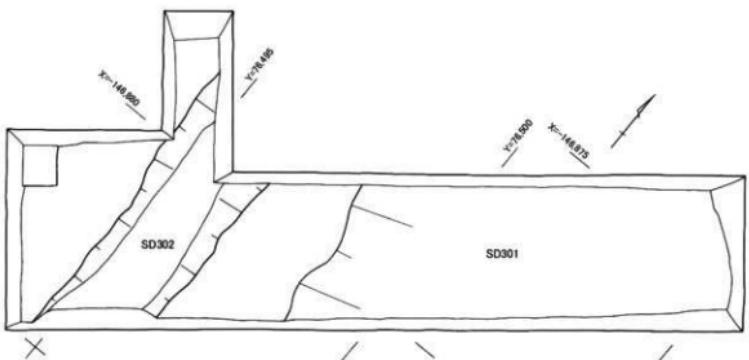


fig.226 第3遺構面平面図

0 5m

溝SD302 1区西半で検出した断面逆台形の溝である。本来の検出面よりも10~20cm削り込んで検出した。上面幅1.9~2.1m、底面幅1.0~1.2m、最大深さ1.2mを測り、南北方向に調査区外へと続いている。先行する自然流路状堆積を掘削して構築されており、底面の標高はT.P.1.1~1.2mを測る。埋土は基本的に砂とシルトの互層で、木質等の有機物に富む暗灰色のシルトが複数回形成されていることから、滯水環境にあったものと考えられる。土層断面の観察から、掘り直しや人為的に埋められた状況は確認されなかった。弥生時代前期後半の土器、曲柄平鉢身や縞み物、樹皮製品などの木製品、自然木、トチノミ等の種実が出土した。

溝SD303 2区東半で検出した深さ20cmの浅い自然流路で、幅4mを確認した。弥生時代前期後半の土器が僅かに出土している。

溝SD304 2区中央で検出した自然流路である。幅1.9m、深さ40cmで南北方向に流れ、1区北東端に續くと考えられるが、この箇所は擾乱が深く確認できなかった。弥生時代前期後半の土器が多く出土しており、検出面の標高からみて、SD302と同時併存していた可能性がある。なお、底面の標高はSD302よりも約70cm高い。

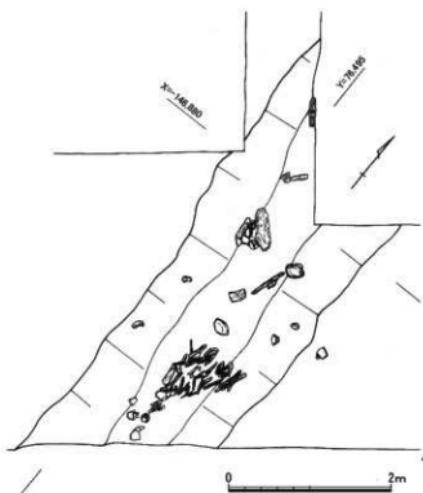


fig.227 SD302 上層平面図



fig.228 SD302 下層平面図

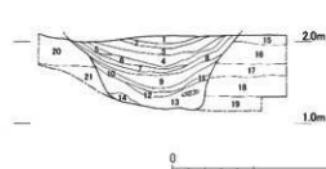


fig.229 SD302 断面図

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. 淡灰色細砂混じりシルト | 12. 淡青灰色シルト（炭・木質） |
| 2. 淡灰褐色シルト～透じり細砂 | 13. 淡青灰色細砂 |
| 3. 淡褐色シルト（炭・木質、粘性高い） | ～淡灰シルト（炭・木質） |
| 4. 黄白色細砂～青灰色細砂 | 14. 淡青灰色細砂シルト |
| ～灰色シルト互層 | 15. 淡褐色砂質土 |
| 5. 黄色中砂混じりシルト | 16. 淡褐色細砂 |
| 6. 淡褐色粘質土（炭・木質） | 17. 淡褐色～淡灰色細砂 |
| 7. 青灰色細砂（ラミナ、自然木集積） | ～シルト互層（ラミナ） |
| 8. 淡褐色粘質土（炭・木質） | 18. 淡青灰色細砂 |
| 9. 淡灰白～灰色細砂～中砂（ラミナ） | ～暗灰色シルト互層（ラミナ） |
| 10. 淡褐色シルト | 19. 暗青灰色シルト（木質） |
| 11. 淡灰色細砂～砂灰色シルト（ラミナ） | 20. 淡褐色細砂（先行する自然流路肩） |
| | 21. 暗灰色混績シルト（先行する自然流路肩） |

3.まとめ

今回の調査では、3面の遺構面を確認した。第1遺構面では多数の溝状遺構を検出した。既往の調査においても、同様の溝状遺構が確認されており、鎌倉時代末～室町時代前半の耕作地と考えられる。出土遺物には平安時代末～鎌倉時代初頭のものも含まれ、溝状遺構が掘削される以前は集落城であった可能性が高いが、大半の遺構は削平を受け、柱穴等を明確することはできなかった。また、古墳時代の須恵器がわずかに出土している。

第2遺構面では弥生時代前期後半の集落を確認した。今回の調査地は、第3・9・10次調査で確認された2重環濠の内側にあたり、同時期の遺構が確認されたものと考えられる。竪穴建物はいずれも全形を窺い得ないが、直径5m以上の円形竪穴建物が、6～7mの間隔をおいて構築されている。近接する第3次調査においても、長径4.5m以上の円形竪穴建物が10m弱の間隔をおいて3棟検出されているが、攪乱による空白地帯も多く、実際の密度は明確にし難い。

第3遺構面では弥生時代前期後半の溝および自然流路を確認した。土層の堆積状況からみて、溝SD302の埋没後に竪穴建物等の遺構が構築されたようである。SD302は環濠の可能性も考えられるが、長さ約5mを検出したのみであり、既往の調査で確認された環濠



fig.230 1区 SD302 上層 (南から)



fig.231 1区 SD302 下層 (南から)



fig.232 1区 SD302 下層遺物出土状況 (北から)



fig.233 2区 SD303・304 (南から)

との平面的な接続関係を追うことはできない。溝の規模や形態を比較すると、前期後半に属する第3・5・9・10・14次調査の環濠は、地点により多少のばらつきはあるものの、断面逆台形～U字形で、濠幅3～5m、底面の標高はT.P.1.6～2.0mであるのに対し、SD302は断面逆台形を呈すが、幅約2mと狭く、底面の標高はT.P.1.1～1.2mと50cm程度低い。

これらの状況が、SD302と他の環濠の時期差を示すのか、あるいは溝の機能差を示すのかは、今後の調査による平面プランの広がりと詳細な遺物の比較検討を待って明確にされるべきと考えるが、弥生時代前期後半の環濠集落の変遷を追う上で重要な成果が得られたといえる。

また、SD302からは曲柄平鍬の身と考えられる木製品が出土した。樋上昇氏によると、弥生時代における曲柄鍬は、和歌山県立野遺跡における前期中葉の自然流路出土例が最古段階とされており、大開遺跡の資料はこれに匹敵する可能性がある。立野遺跡出土例は全長約45cm、軸部長18～23cm、刃部幅8～10cm、厚さ2～3cm程度のものが多く、近畿地方における中期以降の出土例と比較しても形態的な類似性がある一方、大開遺跡出土例は全長約22cm、軸部長約6cm、刃部幅約13cm、厚さ1cm弱と極端に小さく、刃部が円形に近い。農耕具以外の用途も含め、今後の類例の増加が待たれるが、大開遺跡出土例は身と柄が分離する木製品の出現期の資料として重要であるといえる。

18. 中遺跡 第31次調査

1. はじめに

中遺跡は北区八多町中に所在する、平安時代～中世の集落跡である。遺跡が立地するのは、武庫川水系のひとつである八多川に沿って形成された細長い平野上である。遺跡の北西と南東は丘陵によって挟まれている。

中遺跡の調査は、昭和46年（1971）に中国自動車道の建設に伴って実施されて以来、現在までに30次の調査がおこなわれている。過去の調査では、弥生時代～中世の遺構がみつかっている。とくに、中世の掘立柱建物が多くみつかっており、集落が形成されていたことが明らかとなってきた。

遺跡の範囲は南北1.3kmにわたっており、いくつかの地区にわけられる。今回の調査は、遺跡の北端部に近いフケ地区で実施した。調査地の周辺では、平成9年度（1997）に兵庫県教育委員会によって第9次調査がおこなわれている。この調査では、古墳時代後期の堅穴建物や中世前半の掘立柱建物群などがみつかっている。また、平成19年度（2007）には第22次調査がおこなわれており、中世の遺構が検出されている。平成23年度（2011）には、今回の調査地の東隣で第30次調査が実施されており、古墳時代後期頃の溝や中世の柱穴などがみつかっている。

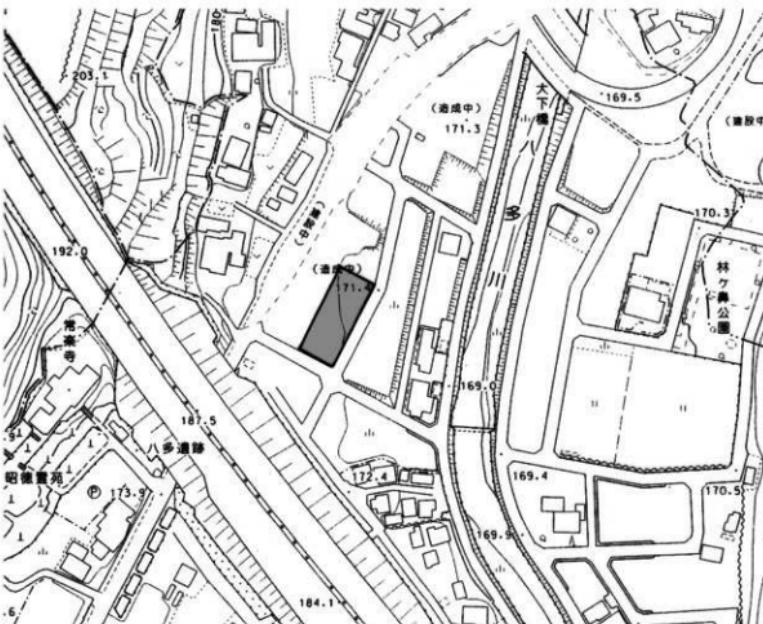


fig.234 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、高齢者住宅建設に伴って実施した。調査対象となったのは、建物の基礎工事によって遺跡に影響があると判断された30か所であり、総面積は約115m²である。

調査区には1～30のトレンチ番号を付けて調査を進めた。このうち、13トレンチはエレベーター基礎部分が重なっており、他のトレンチより広い調査区となっている。また、26トレンチは造成土が堅固に突き固められており、重機での掘削が困難であった。そのため、30cm四方の範囲で地山面を確認した段階で調査を終えている。

基本層序

調査地の現地表面の標高は約173.0～173.6mである。調査区中央付近に段差があり、北半では現地表面が約60cm低くなっている。現地表下には、表土・造成土など現代の堆積が約1.2～1.7mにわたり確認できる。その下層には、残存状態の良いところで旧耕土層が2層確認できる。層厚は20～40cm程度である。それらの層を掘り下げると、地山層である灰白色シルト層が現れる。地山上面の標高は約172.0mであるが、北側では約171.0mと低くなっている。遺構を検出したのは、この地山上面である。

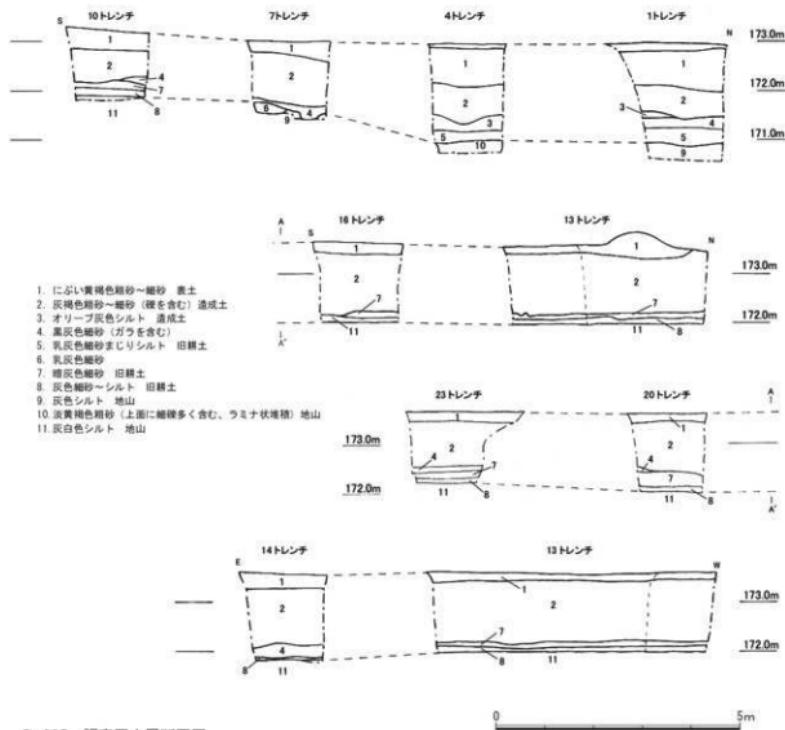


fig.235 調査区土層断面図

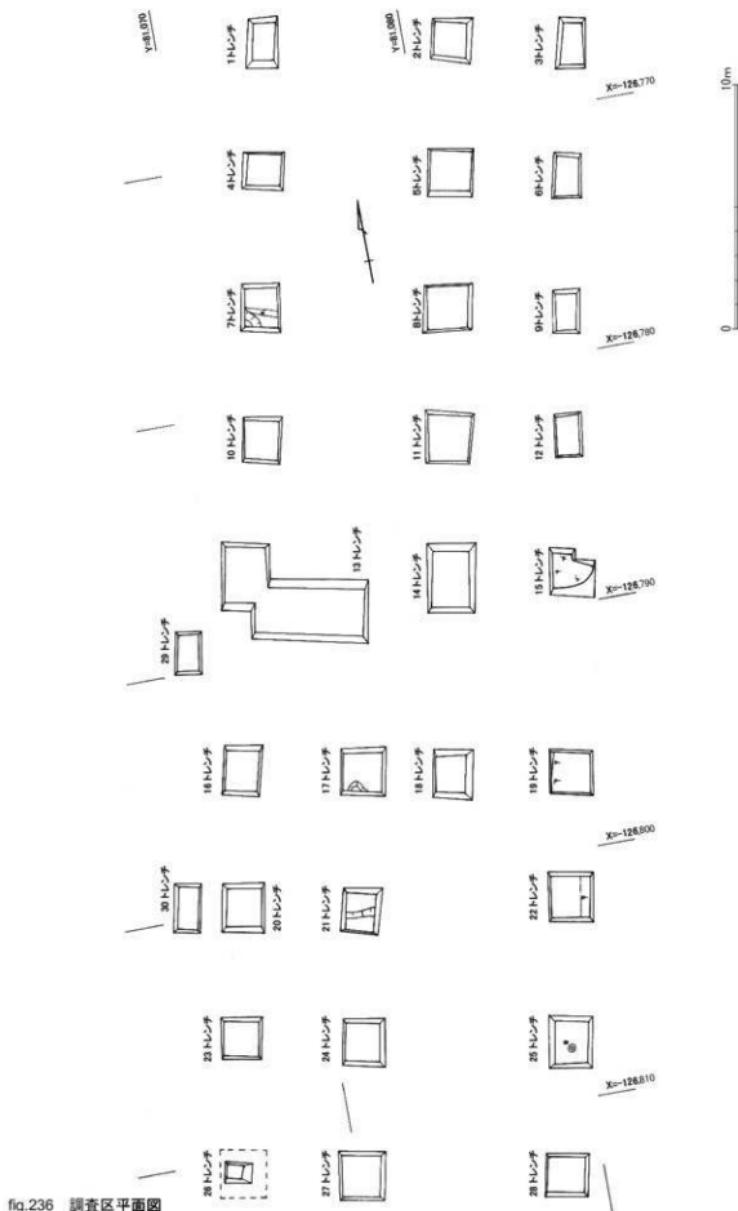


fig.236 調査区平面図

主な遺構・遺物

遺構を検出したのは7・17・21・25トレンチなどに限られ、密度はあまり高くない。調査区の北辺と東辺では造成の際に削平を受けているとみられ、遺構面の残存状態は良くなかった。検出した遺構には、落ち込みやピットなどがある。これらの遺構から遺物は出土しておらず、時期は不明である。また、遺構ではないが、4・8・9・12トレンチではラミナ状の淡黄褐色粗砂層の堆積を確認した。調査区北半の北西から南東方向にかけて、かつて水流があったものと考えられる。

遺物は旧耕土層より少量ながら出土している。主なものに、古墳時代後期～奈良時代の須恵器、中世前半の須恵器・白磁などがある。北半のトレンチからは遺物はほとんど出土しておらず、すべて南半のトレンチに集中している。

3.まとめ

今回の調査は極めて限られた範囲で実施したこともあり、特筆すべき遺構は検出できなかつたが、旧耕土層より古墳時代後期～奈良時代と中世前半の遺物が出土した。

調査地の南東に隣接する地点で行われた第9次調査では掘立柱建物群が見つかっているが、今回の調査ではこれに関連する柱穴などの遺構は検出できなかった。今回の調査地が集落域から外れている可能性や、トレンチの範囲外に遺構が存在する可能性などが考えられる。

なお、出土遺物に関しては、周辺の調査で見つかっている遺構・遺物と概ね同時期のものであり、周辺の調査成果を追認するものである。



fig.237 7トレンチ（東から）



fig.238 17トレンチ（東から）



fig.239 21トレンチ（東から）



fig.240 25トレンチ（東から）

19. 長田神社境内遺跡 第18次調査

1. はじめに

長田神社境内遺跡は六甲山南麓の西端近く、苅藻川流域の現標高 11 ~ 16m付近の扇状地上に立地する集落遺跡である。これまでの調査では縄文時代晚期から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。特に弥生時代末～古墳時代初頭にかけては竪穴建物をはじめとする多数の遺構が確認され、出土遺物も多く、当該期における中心的な集落であったと考えられている。

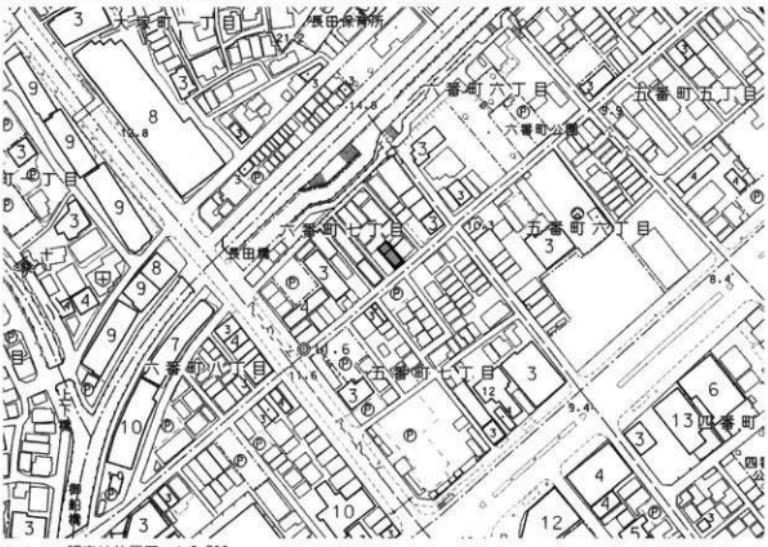


fig.241 調査位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回は個人住宅建設に伴い、工事により埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲についての調査を行った。残土置き場の関係から東西二分割の調査区とし、西半より実施した。0.1 バックホーで遺物包含層上面まで掘削し、以下は人力により遺構・遺物の検出に努めた。

基本層序

調査地の現地表面の標高はおよそ T.P. 11.00mで、現地表面下 20 ~ 30cm は盛土や從前建物の基礎による擾乱や盛土が堆積する。その下層に灰橙色砂質土（近世旧耕土層）、灰色砂質土（中世旧耕土層）、黒褐色粘質土（遺物包含層）が堆積し、その下の灰色シルト層面で遺構を検出した（T.P. 10.60m）。また遺構面を形成する灰色シルト層の下層は灰褐色シルト、黃灰色シルト、灰色砂礫が堆積するが、試掘調査時や調査区中央部での断ち割り調査において、灰褐色シルト層と黄灰黄色シルト層の境目付近から縄文時代晚期の突帯文土器の破片が数点出土した。周辺を精査したがこれに伴う遺構は確認できなかった。出土状況からは灰色シルト層が土壤化する過程で付近より流れ込んだものと推測される。

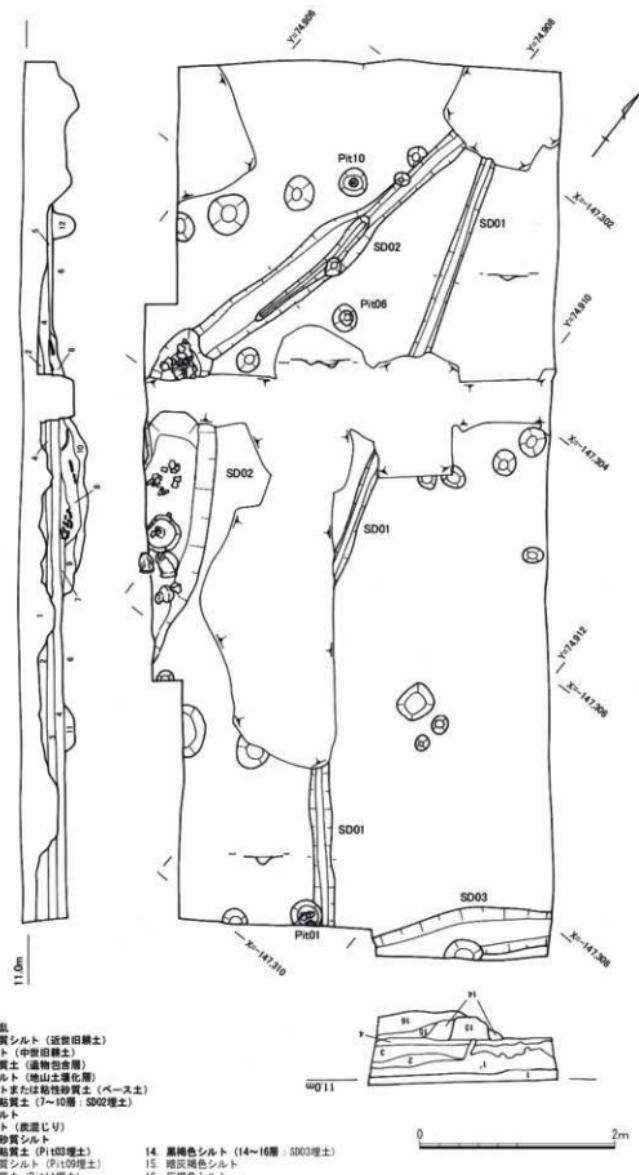


fig.242 調査区平・断面図

今回の調査では溝3条、柱穴約20基を検出した。

溝SD01 北から南に流れる溝で幅約20cm、深さ約10cm、検出長は約8mである。南側でわずかに東に方向を変える。埋土は暗灰色シルトまたは粘質土で、出土遺物は弥生土器と考えられる小片のみであった。

溝SD02 南北方向の溝で西側に延びる。調査区内での検出長は約6mで、調査区の西壁際、溝の南半分の約3.2mの範囲は幅が広くなり深さが増す。この部分が土坑になる可能性を考え、切り合い関係を検討したが明確な差異は確認できず、同じ溝の一部と考えている。溝は北側では幅20cm、深さ10cm、中ほどで幅40cm、深さは一部深くなった箇所で15cmを測る。南東にやや曲がり、土坑状となる部分では幅80cm、深さ30cmとなる。遺物は土坑状部分の上層埋土である黒灰色シルト層からまとまって出土しており、甕が3個体分ほどと鉢3点、広口壺1点などが出土地おり、弥生時代後期～終末期にかけてのものと考えられる。出土状況から土器は据えられていたか、あるいはごく近間から投棄されたと推測される。溝底に堆積する下層の暗灰褐色砂質シルト、炭混じりの灰色シルト層からはほとんど遺物は出土していない。



fig.243 西半遺構検出状況（南東から）

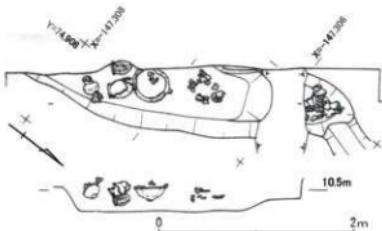


fig.244 SD02 遺物出土状況平・断面図



fig.245 SD02 遺物出土状況（南東から）

溝SD03 調査区の南東隅で長さ2.0mほどを確認した。北東から南西方向に流れる溝である。幅50cm、深さは約30cm、弥生時代後期と考えられる甕の破片などが出土した。

柱穴 今回の調査範囲内では21基の柱穴が検出できた。出土遺物が少ないが、溝から出土の遺物と同じく、弥生時代後期の遺構と考えられる。建物などには復元できなかつた。Pit01で拳大の石が上層と底面から合わせて2個出土したが、根石などになるかは不明である。埋土はいずれも單一層であるが、Pit06、10の底面で円形に一段下がる痕跡を確認した。柱が沈んだ痕跡と思われるがこのほかに明確な柱痕を残すものは確認できていない。

3. まとめ

今回の調査では弥生時代後期の遺構が確認でき、溝からは土器がまとまって出土した。今回の調査地の西側約10mに位置する平成19年度実施の第16次調査地点でも同様の溝が検出されており、そこでは弥生時代後期の甕4点、小型台付甕1点、有稜高杯1点に加え、庄内型甕1点が出土していた。第16次調査検出の溝SD01は東西方向の溝で、今回検出のSD02は南北方向となり、方向は異にするが、溝の一部が幅広となるなど、形状には共通する要素がみられる。同様の遺構が周辺に拡がるものと推測され、その関係性が明らかになるとともに、出土土器についても当地域における弥生時代から古墳時代への変化を考える上で重要なものであり、同じく今後の周辺での調査の進捗が期待される。



fig.246 東半遺構検出状況（南東から）



fig.247 東半南端 SD03 検出状況（西から）



fig.248 第16次調査・第18次調査平面合成図

20. 戻町遺跡 第70次調査

1. はじめに

戻町遺跡は、昭和62年の第1次調査を契機にこれまで、69次に及ぶ発掘調査が行なわれた。その結果、弥生時代における西槇平野西端の拠点集落としての様相が明らかとなってきた。

今回の調査地点周辺は、第1次調査で弥生時代前期の水田やそれ以後の集落に伴う遺構が多く確認できた地点から1ブロック南の地点にあたる。また、平成19年度に実施された第66次調査は今回の調査地の西側隣地にあたる。第66次調査では、弥生時代の遺物を含む河道を検出していることから、1次調査での水田や集落遺構と66次調査での河道との境にあたることが予想された。

2. 調査の概要

東側のL字のトレンチを1・2区として設定した。また東西に長い3区は、東半分を先行して調査し、損壊状況を確認したうえで必要に応じて調査区の延伸や拡張する方針とした。

基本層序

現地表面から1.5～2mは盛土及び搅乱土である。また、従前建物の独立基礎に伴うコンクリートパイルの抜き取り作業により、大半が新たに損壊を受ける状態となっていた。幸うじて損壊を免れた土層は、1～1.3mの青灰色を中心としたシルト層と砂層が複数層ある。特に12層淡青灰色粗砂、16層明青灰色細砂、17層灰色粗砂から弥生時代前期の遺物が出土する。その下層に18層乳灰白色粘土、19層黒灰色粘土が存在する。この粘土層に至るまでの砂層から湧水があるため、常に排水を行わなければ調査を行うことができない状態であった。

3.まとめ

今回の調査では従前建物と、基礎抜き取り時の搅乱により遺跡が大きく損壊されていたことが明らかとなつた。

遺物が出土する青灰色系の砂層は洪水や川の流れの変化により堆積したものと考えられ、周辺に存在する集落から流されて堆積した遺物と考えられる。湧水が激しい上に狭小なため、面的な調査を行うことはできなかつたが、土層観察から生活面が検出できるような安定した土層の存在はなかつた。



fig.249 調査地位置図 1:2,500

下層で確認した粘土層に関しては、水田の可能性も考えられたが、畦畔などの高まりなどを注意して観察を行ったが、見出すことはできなかった。よって、水田經營には不向きな流路あるいは河道、湿地に分類される地点であり、生活空間としての利用はされなかつたものと考えられる。

砂層から出土した遺物を伴う集落が今後の周辺調査において検出されることが期待される。

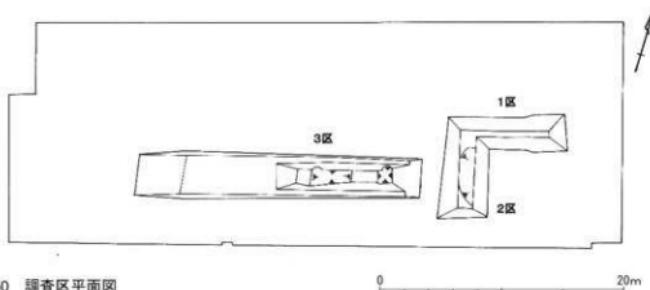


fig.250 調査区平面図

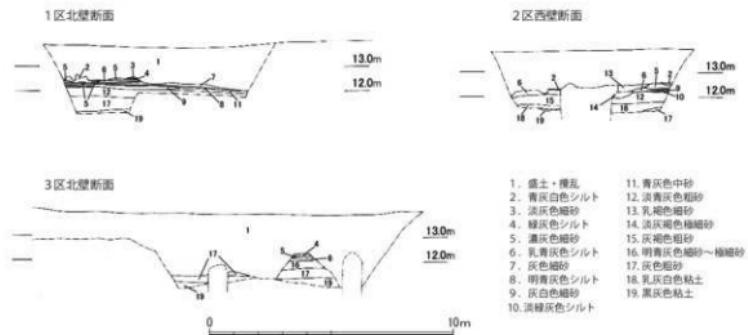


fig.251 土層断面図



fig.252 1区北壁断面（南東から）



fig.253 3区北壁断面（南東から）

21. 大田町遺跡 第19次調査

1. はじめに

大田町遺跡は、妙法寺川左岸の沖積地上に位置する遺跡である。これまでに18次にわたる発掘調査が実施され、弥生時代～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

旧山陽道の位置と重なると推定される県道神戸・明石線の北側では、奈良時代～平安時代にかけての一定の計画性を持つ掘立柱建物群が確認されており、縄糸陶器・灰陶陶器・墨書き土器に加え、少數ながら越州窯系磁器も出土している。また第3次調査では『荒田郡』とヘラ書きされた円面鏡が出土するなど、官衙的要素が強く、「須磨駅家」の候補地とされている。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴う工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を行った。その結果、古墳時代～奈良時代に属すると考えられる遺構・遺物を確認した。掘削残土置き場を確保するため、調査区を7本のトレンチに分割し、1区～7区とした。



fig.254 調査地位置図 1:2,500

基本層序

現地表面の標高は約11.5mを測る。調査区によって若干の差はあるが、深さ約20～50cmまでは現代の盛土（1層）および整地土（2層）であり、それ以下では5～6層の旧耕土層（3～8層）がほぼ水平に堆積する。遺物包含層は標高10.8～10.9m付近に堆積する濃褐色灰色砂質土（9層）で、古墳時代後期～平安時代の遺物が出土した。遺物包含層下の淡灰茶色シルト（24層）上面が遺構面となり、標高は10.6～10.8mを測る。遺構面は地形的に南西方向へやや下る状況にあり、7区南半では旧耕土直下が遺構面となることから、遺物包含層ないし遺構面が一部削平を受けている可能性が考えられる。

検出遺構

溝、土坑、柱穴、ピット等を検出した。

SP03 3区北半で検出した柱穴で、全形の1/2以上を確認した。掘形は平面隅円方形を呈し、

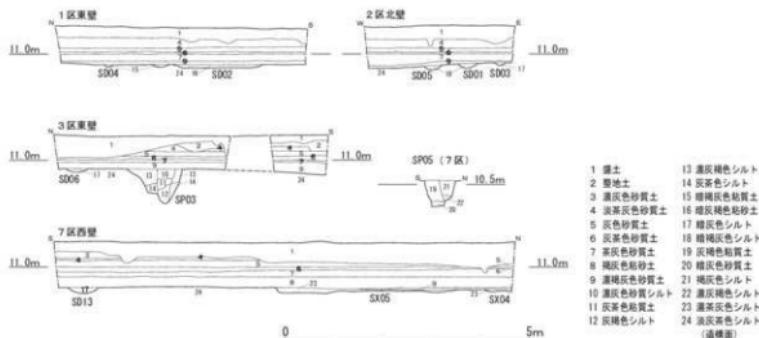


fig.255 土層断面図

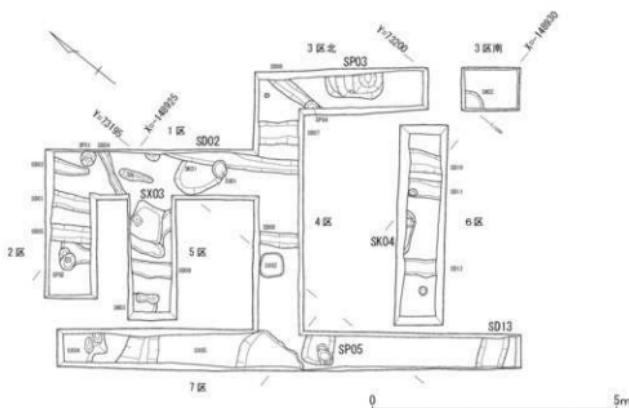


fig.256 調査区平面図

現状で長辺 1.1m、深さ 70cm を測る。柱痕跡と考えられるシルト層の堆積は直径約 25～30cm、底面の標高は 10.13m を測る。土師器・須恵器片のほか、砥石の可能性がある扁平な石の破片が出土している。

SP05 7区中央で検出した柱穴で、全形の2/3以上を確認した。掘形は平面隅円方形を呈し、現状で長辺 60cm、深さ 70cm を測る。掘形の南西隅に柱痕跡と考えられる粘質土と砂質土の堆積があり、直径約 25～30cm、底面の標高は 10.06m を測る。土師器・須恵器片のほか、長辺 13cm の石の破片が出土したが、基礎の地業に関連するものは不明である。



fig.257 1・2区全景（北から）

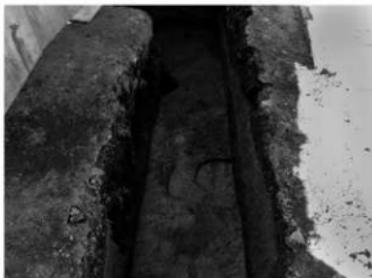


fig.258 3区北全景（南東から）



fig.259 3区南全景（南東から）



fig.260 3区北 SP03（南西から）



fig.261 4区東半全景（南西から）



fig.262 5区全景（北東から）

SX03 5区で検出した落ち込みで、平面形は直角圓形を呈す。底面には長径20cmのピット状の落ち込みがあり、標高は10.15mを測る。土師器・須恵器の細片が出土した。

SK04 6区で検出した土坑である。ごく一部を確認したのみであるが、底面には長径20cmのピット状の落ち込みがある。土師器・須恵器の細片が出土した。

SD02 2区南半で検出した溝で、幅30cm、深さ10cmを測る。土師器・須恵器の細片が出土した。飛鳥時代に属する遺構と考えられる。

SD13 7区南端で検出した溝で、幅60cm、深さ15cmを測る。土師器・須恵器の細片が出土した。今回の調査区において、東西方向に延びる唯一の溝状遺構である。

3. まとめ

今回の調査では、建物に伴うものと考えられる柱穴を2基(S P03・05)検出したほか、溝やピット等の遺構を比較的高い密度で確認することができた。これらの柱穴は規模や形状からみて、周辺における既往の調査で確認されたものと類似している。さらにSX03やSK04についても、遺構内よりピット状の落ち込みを検出しており、柱穴であった可能性が考えられる。

また、調査区各所で深さ10~20cm程度の浅い溝を検出したが、これらの溝は概ねN 30°W方向に走り、既往の調査で確認された柱穴列の主軸方向と似た方向性を持つようである。

出土遺物より、検出遺構の大半は奈良時代に属するものと考えられるが、一部飛鳥時代や平安時代前期の遺構も含まれている可能性がある。今回の調査結果のみから建物の配置や方向性を復元することは困難だが、大田町遺跡の奈良時代における遺構分布を考えていくうえで重要な情報が得られたといえる。



fig.263 4区西半全景（北東から）



fig.264 6区全景（北東から）



fig.265 7区全景（南東から）



fig.266 7区全景（北西から）

22. 垂水・日向遺跡 第40次調査

1. はじめに

垂水日向遺跡は、六甲山系西部の丘陵より大阪湾へと流出する、福田川と天神川の河口付近に所在する縄文時代～中世の遺跡である。昭和62年度にJR・山陽電鉄垂水駅北側の市街地再開発事業に伴い実施された試掘調査によって、その存在がはじめて確認された。昭和63年度に第1次調査が実施されて以来、これまでに30回を超える発掘調査が実施されている。

昭和63年度～平成11年度に垂水駅北東側の日向地区で実施された、再開発事業に伴う発掘調査では、干潟に残された縄文時代早期頃のヒトの足跡、偶蹄目の動物や鳥の足跡など、多数の足跡が検出された。また、約7,300年前の南九州・鬼界カルデラ噴火に伴う、鬼界アカホヤ火山灰の堆積層や疊痕の検出、縄文時代後期頃の洪水層から多量の流木や木の葉などの植物遺体が出土するなど、縄文時代の自然環境・植生に関する貴重なデータが確認された。この他、古墳時代初頭の堅穴建物や平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物群、戸戸など多くの遺構、遺物が確認されている。また、垂水駅北西側の天ノ下地区では、古墳時代頃の堅穴建物、平安時代頃の掘立柱建物などが確認されている。



fig.267 調査位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は社屋建築工事に伴うものである。調査地は垂水駅北側の商店街「垂水センター街」に面した商業地に位置する。調査地の西側隣接地において、平成20年度に実施された第35次調査では、平安時代頃の落ち込みが確認されている。

調査は、工事により影響を受けるエレベーターピット部分及び5ヶ所の建物基礎掘削部分について、人力掘削による発掘調査を実施した。なお、工事計画範囲の内、東側4ヶ所の基礎掘削部分については、東側隣接建物及び排水路の安全確保から、調査の実施はできなかつた。

基本土層

盛土層下に複数の旧耕土・床土層が存在する。この下層に奈良時代～中世の遺物包含層である褐色シルト層が存在し、その下層の浅黄色粘質土層の上面で遺構面を確認した。

1区

調査地の西半中央部に位置するエレベーターピット部分である。遺物包含層から、わずかに土師器、須恵器片が出土したが、遺構は確認されなかった。

2区

調査地の北西隅に位置する。遺物包含層から、わずかに土師器、須恵器片が出土したが、遺構は確認されなかった。

3区

調査地の北側中央に位置する。旧耕土層下に遺物包含層（褐色シルト）は存在せず、黒色粘質土を埋土とする、東側へ緩やかに落ちる落ち込み（S X01）を検出した。埋土中からは、弥生時代中期前半頃（第II様式）の弥生土器甕片や須恵器、土師器、瓦器片など弥生時代～鎌倉時代頃の遺物が出土した。

4区

3区の南側に位置する。3区と同様、旧耕土層下に遺物包含層（褐色シルト）は存在せず、黒色粘質土を埋土とする落ち込み（S X01）を検出した。

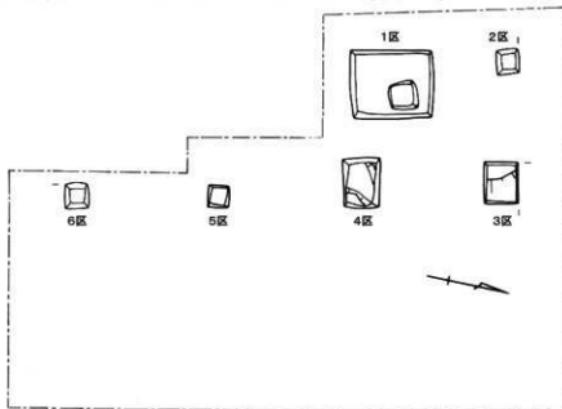


fig.268 調査区平面図

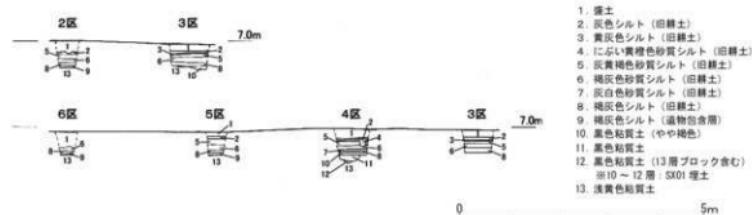


fig.269 調査区断面図

落ち込みSX01 旧耕土層下の黒色粘質土は、10cm前後で調査区内全体に検出され、これを掘り下げる上層よりも黒色の強い黒色粘質土が幅1.2m前後、検出面からの深さ35cm前後で、北東～南西方向の溝状に検出された。埋土は2層に分かれ、下層では地山層である浅黄色粘質土が細かなブロック状に混入する。埋土中からは完形の土師器蜻蛉1点の他、奈良時代～平安時代頃の須恵器、土師器片が多く出土した。

5区

4区の南側に位置する。遺物包含層から、わずかに土師器、須恵器片が出土したが、遺構は確認されなかった。

6区

5区の南側に位置する。遺物包含層から、わずかにサヌカイト、土師器、須恵器片が出土したが、遺構は確認されなかった。

3.まとめ

今回の調査では、3・4区で落ち込み(SX01)を検出し、埋土からは奈良時代～平安時代頃を中心とする、弥生時代～鎌倉時代頃の遺物が比較的多く出土した。近隣では、これまでの天ノ下地区における発掘調査により、現在の商大筋東側からウエステ垂水付近にかけて、古墳時代及び平安～鎌倉時代頃の集落の存在が確認されている。

調査地付近は市街地化が進行し、現在では詳細な地形観察は困難である。しかし明治19(1886)年測量の地形図などから、失われた地形を読み取ることができる。これらの観察から、



fig.270 1区全景（北から）



fig.271 2区全景（東から）



fig.272 3区全景（南から）



fig.273 4区全景（南西から）

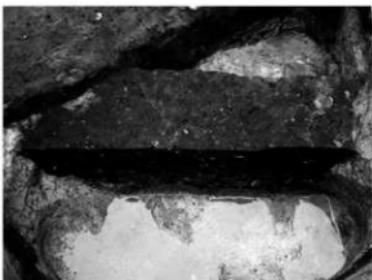


fig.274 SX01 断面（南西から）



fig.275 5区全景（東から）



fig.276 6区全景（東から）



fig.277 調査前状況（南から）

調査地は福田川により形成された開析谷の丘陵側端部、傾斜変換点付近に位置し、地形は北西側の丘陵から南東方向へ向かって下がる状況が確認できる。これは垂水天ノ下郵便局方面から調査地方面へ、垂水センター街の街路が緩やかに下がっていることからも確認できる。

今回の調査では、少數ではあるがSX01での弥生土器片や遺物包含層からのサスカイト片など、弥生時代の遺物が確認されたことは特筆される。また、SX01は、第35次調査で確認されたものと同様、北側の丘陵から派生する谷状の落ち込みのひとつとも考えられ、くぼみ状の低い部分へ埋土の堆積と共に遺物が流入したものであろう。SX01からの出土遺物は、奈良時代～平安時代頃の遺物が多く見られるが、鎌倉時代（13世紀）頃の時期が考えられる瓦器塊の底部片が出土していることから、SX01は鎌倉時代頃には埋没したものと考えられる。これらの遺物は、調査地北西方向に存在すると考えられる集落域からの流入も考えられるが、比較的出土量が多い点と磨滅を受けていない点から、調査地に近接する地点からのものと考えられる。

現在、天ノ下地区における集落域の東側への範囲は明らかではないが、これら遺物の出土は集落域が東側へ、さらに拡がる可能性を示唆するものとも言えよう。